John Wallis (1616–1703) の語形成論・語源論の研究 (2)

——語源探究と音象徴の問題——*

宮脇正孝

本稿の前編である宮脇(2004)においては，ジョン・ウォリス(John Wallis)の『英文法』(*Grammatica Linguæ Anglicanæ*, 1 st ed., 1653)の第14章「語源論」("De Etymologia")の位置付けを，『英文法』の目的と方向性との関連で検討した。そして，ウォリスが，ある面では，言語一般の普遍性に関心を持ち，他の面では，英語という個別言語の特殊性に興味を持っていることを明らかにした上で，彼の語源論は後者の関心事に属するものであると結論付けた。すなわち，ウォリスの語源論は，個別言語としての英語の特質(genius)を闡明することを目指したものだということである。

本稿では，そのとき予告したように，ウォリスの語形成論および語源論の内容の詳細をまとめてみたいと思う。単にある文書の要約を作るというのでは研究とは言えないであろう。が，そもそもウォリスの「語源論」はラテン語で書かれており，今日原文で読める人が少ないこと，また，17世紀の文書であるので，その内容を整理するにもかなりの再構成や解釈を必要とすることから，このような試みも正当化されるであろう。むろん，内容を明らかにした後には，ウォリスの語源論の歴史性と今日性とについて，言語学史的評価を加えるつもりである。

「語源論」の内容

ウォリス自身の最終的な改訂が反映されている第5版(1699)では，「語源論」は大きく二部に分けられており，第一部は「規則的な語形成」("Analogice Formata")，第二部は「より遠い語の起源」("Derivata Remotiora")と題されている。「より遠い」というのは，規則的な語形成の場合ほどには関係が明確でないものということであり，ここでいわゆる語源の問題が扱われる。各部では，次の論題が取り上げられている。

第一部「規則的な語形成」

1．所有形容詞の形成
2．名詞・形容詞からの動詞の形成
3．分詞の形成および動詞からの名詞の形成
4．接尾辞の付加による形容詞の形成
5．指小語および増大語の形成
6．接尾辞による抽象名詞の形成

第二部「より遠い語の起源」

1．同語源語間の関係
2．「ものを示す音」：本来語の創造原理としての音象徴
3．外来語の借用
4．多音節の借用語の単音節語への縮約
5．同音異義語
6．混成語

以下，それぞれの論題がいかに取り扱われているかを見てみよう。

第一部「規則的な語形成」

1．所有形容詞の形成

ウォリスは，名詞の属格を認めず，いわゆる属格とされるものは所有形

容詞(possessive adjective)として扱う。これは屈折による語形変化(inflectional morphology)に属することであり，すでに『英文法』の第5章で触れられていることである。すわなち，通常，名詞の語尾に –s を付けて，*man's* nature, *men's* nature, *Virgil's* poems とするなどである。ここでは，この語形変化についての補足として，古くは –r または –re が付されていたことを指摘している。以下，ウォリスの言説をまとめてみる。

> これは低地ドイツ語のやり方に見られるもので，例えば，地名の Amsterdam(アムステルダム)は，元来，Amstelre–dam であった。つまり，「Amstel 川の堤」という意味である。同様に，英語の人称代名詞から作られる所有形容詞の your, their, her, our などは，それぞれ you, they, heo(she の古い形)，we に –r, –re を付して作られたものである。(Wallis 1699 : 40)

ここで不可解なのは，これに続けてウォリスが，hushand–ry, nurse–ry, infant–ry, image–ry などの接尾辞も，上の –r, –re と同じだと述べていることである。これらの語尾は，「性質，行為，状態」などを表す名詞を作る接尾辞であって，所有形容詞を作るものとは言い難い。現にウォリス自身も，これらの語の後に他の名詞を続けて並べておらず，これらの語を形容詞として扱っている様子はない。ウォリスが混乱していたのか，あるいは何かこれらをも一種の「所有形容詞」として捉える見方があり得るのか，今のところ判然としない。

2．名詞・形容詞からの動詞の形成

次に，名詞や形容詞から動詞が形成されるプロセスが取り上げられる。いくつかの例を挙げておこう。

- そのまま動詞として用いられるもの : to shade (< shade), to fish (< fish), to oil (< oil), to love (< love), to rule (< rule).
- 母音が変化したり，子音が有声化するもの : to house (< house), to

glaze (< glass), to breathe (< breath), to live (< life), to strive (< strife).

・接尾辞 –en を付けるもの: to hasten (< haste), to lengthen (< length), to strengthen (< strength), to frighten (< fright), to enliven (< life), to shorten (< short), to whiten (< white), to fasten (< fast), to harden (<hard), to brighten (< bright).

3．分詞の形成および動詞からの名詞の形成

動詞の語尾に –ed あるいは –en を付けることによって「受動分詞」(過去分詞)が，また，–ing を付けることによって「能動分詞」(現在分詞)が作られる。後者と同じ –ing 形は名詞的にも使われ，その場合は動名詞であると言える。例えば，heard, hearing (< to hear); given, giving (< to give) など。これは，すでに第8章で触れたことである。

また，動詞に接尾辞 –er を付することによって，動作主を表す名詞が作られる。例えば，a hearer (< to hear); a giver (< to give) など。

4．接尾辞の付加による形容詞の形成

名詞にさまざまな接尾辞を付すことによって，形容詞を作ることができる。以下，接尾辞ごとにまとめてみよう。

–y:「多量」を表す形容詞: wealthy (< wealth), healthy (< health), witty (< wit), watery (< water), hearty (< heart).

–ful:[1]「充満」を表す形容詞: joyful (< joy), youthful (< youth), careful (< care), useful (< use), plentiful (< plenty).

–some:「豊富さ」を表す形容詞（–ful よりもやや程度が劣る）: delightsome (< delight[2]), irksome (< irk), burdensome (< burden), troublesome (< trouble), wholesome (< whole).

–less:「欠乏」を表す形容詞: worthless (< worth), heartless (<

heart), joyless (< joy), helpless (< help), comfortless (< comfort). これと同様に，形容詞に接頭辞 un–, in–を付して同じく「欠乏」を表すこともできる。例えば，unpleasant (< pleasant), impatient (< patient) など。また，「欠乏」を表す接頭辞ということに関連してさらに言えば，mis–, dis– を動詞や名詞に付すことにより，「反対の動作」，「不～，非～」や「誤って～する」，「悪い～」を表すことができる。例えば，to dislike (< to like), dishonour (< honour); to mistake (< to take), misdeed (< deed) など。

–ly :「類似」を表す形容詞 : giantly (< a giant), earthly (< earth), heavenly (< heaven), worldly (< world), godly (< God). ときに，goodly (< good) のように，形容詞に –ly が付されて別の形容詞を作ることもある。通常，接尾辞 –ly が形容詞に付されると副詞を作ることについては，第13章で扱われている。

5．指小語および増大語の形成

5 – 1　指小形容詞

–ish :「小さき，縮小」を表す指小形容詞：greenish (< green), whitish (< white), softish (< soft), thievish (< a thief), childish (< a child). このように，この接尾辞は形容詞にも名詞にも付いて，指小形容詞を作る。

5 – 2　指小名詞

–ock, etc. :「小さい～」を表す指小名詞 : a hillock (< a hill), a parcel (< a part), a cockrel (< a cock), a satchel (< a sack), a pocket (< a poke), a gosling (< a goose), a lambkin (< a lamb), a chicken (< a chick), a minikin (< a man), Halkin ('little Hal'), Wilkin ('little Will'), Thomkin ('little Tom'). このような指小名詞の数は，それほど多くない。

5－3　音(とくに母音)を変えることによる指小語と増大語

例えば，sup は「ものを口に入れる」ということであるが，母音を i に変えて sip とすると，「少量を口に入れる」という感じになる。つまり，母音 i には「小ささ」を表す音象徴性があるということである[3]。また，母音を oo に変えて soop にすると，「がつがつ食べる」となる。これは，母音 oo に「増大」を表す音象徴性があるからである。さらに，名詞としては，sop は「(スープなどに浸したパンの)一口分の量」であるが，sippet とすると，「小さな一口分」となる。これは，母音 i の音象徴性に加えて，指小辞の –et が付いていることによる。

また，great，little，pretty を，母音を伸ばして grea–t，lee–tle，pree–ty と発音すると，それぞれ「極めて大きい」，「極めて小さい」，「かわいらしい」というニュアンスになる。これは，母音を伸ばして強く発音することが，元来の意味を増大させることにつながるからである[4]。

他の例としては，ting–tang–tong という母音が異なる連続音が，「高い鐘の音」，「中くらいの鐘の音」，「低い鐘の音」の連なりを表していることが挙げられる。これは，母音 i，a，o が，それぞれ「小さいこと」，「中くらいの大きさであること」，「大きいこと」を表現するのに適した音象徴性を持つことによる。

6．接尾辞による抽象名詞の形成

さまざまな接尾辞によって抽象名詞が作られる。以下，例を挙げてまとめる。

–ness（形容詞に付く）：whiteness (< white), hardness (< hard), greatness (< great), skillfulness (< skillful), unskillfulness (< unskillful).

–head, –hood（主として名詞に，ときに形容詞に付く）：Godhead (< God); manhood (< man), childhood (< child), maidenhood (<

maiden); likelihood (< likely), falsehood (< false).

–th (名詞または動詞に付いて，しばしば母音の変化を伴う): length (< long), breadth (< broad), warmth (< warm); death (< die), growth (< grow), birth (< bear).

–ship (名詞に付いて，身分・職・状態などを表す): kingship (< king), wardenship (< warden), fellowship (< fellow), chancellorship (< chancellor), lordship (< lord).

–dom, –ric, –wick (名詞または形容詞に付いて，領域・状態などを表す): kingdom (< king), dukedom (< duke), freedom (< free), wisdom (< wise); bishopric (< bishop); bailiwick (< bailie or bailiff).

–monger (名詞に付いて，～を売る商人，～屋などを表す): fish–monger (< fish), wood–monger (< wood), iron–monger (< iron), whore–monger (< whore), news–monger (< news).

–ment, –age (動詞や名詞に付いて，動作・結果・状態などを表す): commandment (< to command), government (< to govern); passage (< to pass), marriage (< to marry), vicarage (< a vicar). これらの語は，英語の動詞や名詞から作られたものばかりでなく，直接ラテン語やフランス語から入ったものもある。したがって，ornament や heritage のように，名詞はあっても，それの元となる動詞形は英語にはないものもある。同様に，–ation, –ion で終わる名詞も，その多くは直接ラテン語やフランス語から入ったものである。例えば，nation, condition, notion, question, determination, discretion など，無数に挙げることができる。

第二部「より遠い語の起源」

1．同語源語間の関係

第二部では，まず，語源を同じくする語(cognate words)の関係が取り上げられる。同じような音で，かつ何らかの意味の共通性や類似性を持つような語が，代表的な語の下にまとめられている。

Beat : to beat, to batter ; a bat, a battle, a beetle ('a mallet for driving wedges'), batter ('flour, water and eggs mixed by beating with a spatula'). これらの語は，「たたく，打つ」という意味を何らかの仕方で共有しており，ラテン語の battuo ('to beat') に由来すると思われる[5)]。

Take : to take, to touch, to tack ('to sew together') ; a tick ('a light touch'), tickle ('repeated light touches'), a tack ('nail on which things are hung'). これらの語は，「さわる，接触する」という意味を何らかの仕方で共有しており，ギリシャ語の θιγγάνω ('to touch') に由来すると思われる。ラテン語の tango ('to touch') もこのギリシャ語に遡る。

Let : to let ('to block, impede'), to loiter ; a let ('an impediment') ; lest ('in case not') ; late ('delayed'), lazy. これらの語は，「邪魔をする，妨害する」という意味を何らかの仕方で共有している。

Guird : to guird, gird ('to encircle'), to guard ('to surround by escorts, defend militarily') ; a girdle, a garter ('a belt, especially for the leg'), a yard ('enclosed ground'), guardian. これらの語は，「取り囲む，取り巻く」という意味を何らかの仕方で共有しており，ラテン語の gyro ('to turn') に由来すると思われる。

Two : two, twain, twice, twins, to twine ('to twist threads together, like twins'), to twist, to twirl ('to twist together rapidly'), a twig ('a small branch, easily twisted'). これらの語は，「2」あ

るいは「2つのものをより合わせる」という意味を何らかの仕方で共有しており，ギリシャ語の δύο あるいはラテン語の duo ('two') に由来すると思われる。

Die : to die, death, dead, deadly ('lethal'), to dive ('to dip under water'), to dip, to dowse ('to immerse deeply'), to dye ('to change the colour of something'), down, to drown ('to drive down, to submerge'). これらの語は，「下へ，下方へ」という意味を何らかの仕方で共有しており，ギリシャ語の δύω, δύνω ('to undergo') や，ラテン語の deorsum ('downwards') に見られる de に関連があると思われる。

Sn–[1] : nose, nostril, snout ('a large nose'), to sneeze, to snore, to snicker ('to laugh with wrinkled nose'), to snuff, to snuffle ('to breathe noisily through the nostrils'), to snarle (as dogs do, with flared nostrils), to snudge ('to walk or to lie with one's nose turned down towards one's chest'). これらの語は，「鼻」に関連のある意味を何らかの仕方で共有しており，ラテン語の nasus ('nose') に由来すると思われる。他にも –ness という形で，さまざまな岬の地名 (e.g., Cath–ness, Holder–ness, Foul–ness) に見られる。「岬」とは，海岸に突き出た「鼻」のようなものである。

Sn–[2] : snake (a creature which moves with an undulating motion), to sneak ('move furtively and noiselessly, like a snake'), to snail ('to move silently'), a snare ('a hidden trap'), to ensnare, to snatch ('to catch hold of suddenly and unexpectedly'), to snib ('to rebuke quietly'). これらの語は，「曲がりくねる，こっそり～する」という意味を何らかの仕方で共有しており，ラテン語の sinuo ('to wind') に由来すると思われる。

Sh– : shy, to shun, shield, to shield, shade, to shade, shadow, to

shadow, to shelter, shift ('a trick, subterfuge'), to shove, a shovel, a showl, to shrink, to shrivel, to shroud, a shroud ('a wrapping, especially sepulchral'). これらの語は,「隠す, 覆う」という意味を何らかの仕方で共有している。

Bl-: blow, blast, to blast, to blighten ('to damage plants by a harmful wind'), bleak ('exposed to the elements'), to bleach ('to whiten linens by exposing them to the sun and wind'), to bluster ('to breathe in an uncontrolled and noisy way', hence 'to talk loudly and boisterously'), a bleb ('a small bubble in glass'), a blaze ('a spectacular fire'), a bloom, blossom ('flower on a tree'). これらの語は,「吹く」という意味を何らかの仕方で共有しており, ラテン語の flo ('to blow') に由来すると思われる。ここでは f → b の子音交替が起こっている。

2.「ものを示す音」: 本来語の創造原理としての音象徴

次に「ものを示す音」("Soni rerum indices") という見出しのもとに, 音象徴 (sound symbolism) の問題が扱われている。この項の冒頭に, ウォリスはこう述べている。

> 我が国語の語彙には, 語の音と語が表す事物との間に対応が見られるような場合が極めて多いことは, 注目に値する。例えば,「薄い, 鋭い, 厚い, 鈍い, 柔らかい, 荒い, 澄んだ, 暗い, 甲高い」などの印象を与える音が, 事物に内在する同様の属性を表すことがしばしばあるということである。しかも, このようなことは, しばしば一語の中に見られるのである (たとえそれが単音節語であったとしても)。 (Wallis 1699: 46)

簡単に言えば, 多くは単音節語である英語の本来語の中には, 語の音が, その音象徴性によって, 語の意味を的確に表現しているものが多いと

いうことである。このような，英語の語彙項目を構成する音の象徴性の問題が，数多くの例とともに論じられている。[6]

2－1　語頭の子音群

Str–：「力強さ」を表す。Strong, strength, stride, stress, strand, straddle, stroke, strife, straight, strict, to strike, to strive, to struggle, to stretch, to strain, to straggle.

St–：「強さ」を表す点では上の str– と同様であるが，str– よりは程度の劣る強さを表す。言わば，新しいものを獲得するというよりは，現在あるものを保持するのに十分な強さといった感じである。したがって，「堅実さ，不動性」などと言ってもよい。To stand, to stay, to stop, to stick, stock, stud, steady, steadfast, stable, stall, still, stout, sturdy, stiff, steel, stern, staunch, to stare, standard, stately.

Thr–：「激しい動き」を表す。To throw, to thrust, throng, to throng, to throb, through, to threat, to threaten, thrall, thralldom.

Wr–：「曲がりくねった動き，ねじれ」を表す。Wry, to wreathe, to wrest, to wrestle, to wring, wrong, to wrench, to wriggle, to wrangle, wrinkle, wrist, to wrap.

Br–：「破損，激しい破砕(とくに大きな音を引き起こすもの)」を表す。To break, brake, breach, brittle, to bruise, to bray, briar, bramble, to brawl, brabble.

Cr–：「破損(とくに騒音を伴うもの)，歪曲」を表す。通常，曲げることや位置をずらすことに関連する。To crack, to creak, crease, crevice, crag, cruise, crump, to crumble, to crop, to crash, crook, crooked, to creep, to crawl, cripple, to crumple.

Shr–：「力強い収縮」を表す。To shrink, to shrivel, to shrug,

shrimp, shrub, shrill, to shrike, to shreek, to shrive, shrift, shrew, shrewd, shroud.

Gr–：「荒いもの，硬いもの，厄介なもの，まったく不快なもの」を表す。To grate, to grind, to gripe, grip, greedy, to grapple, to grieve, grief, to groan, to grunt, to grumble, to growl, to grin, grave, grum, grim, grisly, to grub, to grovel.

Sw–：「音を立てない運動，柔らかい横への動き」を表す。To sway, to swag, to swagger, to swerve, to sweep, to swill, to swim, to swing, swift, to swinge.

Sm–：上のsw–と同じく「音を立てない運動」を表す。Smooth, smug, to smile, to smirk, to smite, to smell, smack, to smother, smart.

Cl–：「粘着，固執，くっついて離れないこと」を表す。To cleave, clay, to cling, to clamber, to clasp, to clip, to clinch, clog, to cloy, close, clod, a clot (a clot of blood), clotted cream, clutter, cluster.

Sp–：「(とくに高速での)拡散，拡張，散乱」を表す。とくにrが加わってspr–となると，「高速で」という感じが強くなる。To spread, to spring, a sprig, to sprout, to sprinkle, to split, splinter, to spill, to spit, spit, spittle, to sputter, to spatter.

Sl–：「音を立てない落下，容易には気づかないような動き」を表す。To slide, to slip, slippery, slime, sly, sleight, to slit, slow, slack, slight, sling, to slap.

Sq–, sk–, scr–：「激しい圧縮」を表す。To squeeze, to squirt, to squeek, to squeak, to squeal, to squawl, to skreek, to shreek, to screw.

2－2　語尾の母音＋子音群

–ash, –ush：いずれの語尾も子音–shによって「すばやい突然の動

きで，いきなり終わるものではなく，徐々に終わるもの」を表す。しかし，一方，–ash は，母音 a によって「より明確で鋭い」動きを表し，他方，–ush は，母音 u によって「より鈍く静かな」動きを表す。Crash, rash, gash, flash, clash, lash, slash, plash, trash; crush, rush, gush, flush, blush, brush, hush, push.

–ing, –ink : 一方，–ing は，鳴り響く子音 ng と鋭い母音 i とによって，「突然にではなく，むしろ徐々に消えてゆくような小さい動きや継続的な震動」を表す。他方，–ink は，同じく「小さな動き」を表すにしても，まったく無声である子音 k により，「突然終わる」動きであることを示す。Fling, sling, ding, swing, cling, sing, ting, wring, sting; tink, wink, sink, clink, chink, think.

–ingle, –inkle : 上の –ing, –ink に子音 l が加わると，小さな動きの「反復」や「頻繁さ」を表す。Jingle, mingle, tingle; tinkle, sprinkle, twinkle. これらの動詞は，母音 i のせいで指小語であると同時に，子音 l のせいで反復動詞であるとも言える。

–angle : 上の –ingle, –inkle と同様に動きの「頻繁さ」を示す。しかし，この場合は，より明るい母音 a のせいで，それほど小さな動きではない。Jangle, tangle, spangle, mangle, wrangle, brangle, dangle.

–umble, –amble, –imble : これらの語尾はいずれも，子音 mb が「混乱」を示し，子音 l が「反復」を示すことによって，「何か混乱したものの繰り返し」を表す。しかし，–umble は不明瞭な母音 u のせいでより不明瞭なものを暗示し，–amble は明瞭な母音 a のせいでより生き生きとしたものを暗示し，–imble は鋭い母音 i のせいでより鋭敏ですばやいものを暗示する。Mumble, grumble, jumble, tumble, stumble, rumble, crumble, fumble, bumble; amble, ramble, bramble, scamble, scramble, wamble; nimble,

wimble, thimble.

このような音象徴語を数多く取り上げて論じた後で，ウォリスは次のように結論している。

> このような現象は英語に極めてしばしば見られるので，この点で英語に匹敵する言語を私は他に知らないほどである。ときには，英語ではわずか一音節の語(英語の本来語はたいてい単音節語である)で表されることが，他の言語では語を組み合わせて合成語を作ったり，多くの語を連ねて回りくどい言い方をしたりしなければ表現できないこともある。そして，我が国語の語彙のたいていは，このように音象徴によって作られているのである。さらに言えば，このような仕方で作られた語は，昔はさらに多かったのである。フランス語が大量に英語に混ざり込んできて，我が国語の本来語を追い出し，忘却の彼方へ追放する以前は。(Wallis 1699 : 50)

ここに述べられていることは，次の三点に要約できる。

(a) 英語はおそらく音象徴語のもっとも豊かな言語である。

(b) 英語ならばわずか一音節の語をもって表すことのできる意味が，他の言語ならば合成語や複数の語をつないで表さなければならないことがある。

(c) 英語の本来語はたいてい音象徴の原理で作られている。ノルマンの征服(1066)のせいでフランス語が大量に流入し，多くの英語の本来語を追い出してしまう以前は，今よりも遥かに多くの音象徴語が英語に存在したはずである。

このように，ウォリスは，英語は音象徴語の多さゆえに表現力の豊かな言語であり，英語の本来語の主要な造語原理は音象徴であり，ノルマンの征服以前の英語にはもっと数多くの音象徴語があったと述べている。音象徴の問題については，後で再び取り上げることにする。

3．外来語の借用

ウォリスによれば，英語には数多くのラテン語からの借用語があり，実際，単音節語以外のものは，たいていラテン語から入ったものである。が，ラテン語起源であっても，フランス語を経由して入ったものもまた多い。以下，数例ずつを挙げてまとめてみよう[7]。

3－1　名詞

・ラテン語から直接入ったもの：nature (< natura), grace (< gratia), clemency (< clementia), synod (< synodus), ingenious (< ingeniosus), ornament (< ornamentum).

・フランス語を経由して入ったもの：bounty (< F bonté < L bonitas), lion (< F lion < L leo), almes (< F almosne < L eleemosyna), tense (< F temps < L tempus), new (< F nieu < L novus), strange (< F estrange < L extraneus).

3－2　動詞

・ラテン語の現在時制から入ったもの：extend (< extendo), conduce (< conduco), despise (< despicio), approve (< approbo), conceive (< concipio), distinguish (< distinguo).

・ラテン語の動詞状名詞から入ったもの：supplicate (< supplico, supplicatum), demonstrate (< demonstro, demonstratum), dispose (< dispono, dispositum), suppress (< supprimo, suppressum), collect (< colligo, collectum), contract (< contraho, contractum).

・二重語（同語源であるが，一方はラテン語から直接，他方はフランス語を経由して入ったもの）：compound, compose (< compono), expound, expose (< expono), refer, relate (< refero), confer, collate (< confero), comprehend, comprise (< comprehendo), confound, confuse (< confundo).

3－3　フランス語からの借用語

フランス語の語彙の多くはラテン語またはゲルマン語起源であるので，通常フランス語からの借用語とは，究極的にはラテン語あるいはゲルマン語起源の語ということになる。が，次のような語は，そもそもフランス語の本来語であるものが英語に入った語であると考えられる。Garden (< jardin), garter (< jartier), buckler (< bouclier), to advance (< avancer), to cry (< cryer), to plead (< plaider) など。

3－4　ゲルマン語起源の語

次に，ゲルマン語起源の語が取り上げられる。英語自体がゲルマン語の一つであるので，これは借用語と言うよりは，本来語と言うべきであろう。Wine, wind, wend, way, wall, wallow, wool, will, worm, worth, wasp, day, draw, tame, yoke, earth, over, break, fly, blow など。そして，以上の語に相当するラテン語もあるものの(例えば wine に対する vinum, wall に対する vallum など)，ゲルマン語がラテン語から借用したのか，ラテン語がゲルマン語から借用したのか，さらにはもっと古い共通の源から両語が借用したものなのか，はっきりしないとウォリスは言う。が，「ゲルマン語は，ラテン語よりも古い言語である」(1699：52)という言説からすれば，その多くはラテン語がゲルマン語から借用したものと見なしているようである。ここに，英語を含めたゲルマン語に大きな誇りを抱く「ゲルマン語崇拝者」(Germanophile)としてのウォリスの言語観を垣間見ることができる。

3－5　ギリシャ語起源の語

次に触れるのは，英語がギリシャ語から直接借用した語というよりも，ゲルマン語の時代にギリシャ語から入り，それが今の英語にも残っている語である。ウォリスは，ラテン語には，これらに相当する語はほとんど見あたらないと言う。path, πάτος；ax, achs, ἀξίνη；door, θύρα；daughter, θυγατὴρ；mead, μεθὺ；fire, πῦρ；laugh, γελάω など。さらに多く

の語のペアが挙げられており，例えば，door と θύρα とに見られる θ → d のような子音交替が指摘されている。

4．多音節の借用語の単音節語への縮約

英語の本来語には単音節語が多く，単音節語が英語の特質を構成している重要な要素の一つである。したがって，他の言語からの借用語も，元来は多音節であったとしても，英語の特質に合わせて単音節語に縮約される傾向がある。この現象は，次のような過程の一つ，あるいはいくつかの組み合わせによって生じる。

(a)　屈折語尾あるいは派生語尾を落とす。

(b)　語頭の音(とくに母音)を落とす。

(c)　語中の母音や弱い子音を落とす。

(d)　残った子音を，同じ器官で調音される他の子音と入れ替える。

(e)　さらに，残った子音の順序を音位転換(metathesis)によって入れ替える。

これらの原理は，後の比較言語学によって確立される語源解明の手続きを，素朴な輪郭で予兆するものと言えよう。ラテン語からの借用語を縮約したとする例をいくつか挙げておこう。

・語尾や語頭の音が落ちた例：spend (< expendo), speed (< expeditio), sample (< exemplum), scape, skip (< excipio), strange (< extraneus), to screw (< excrucio), to shoot, shout, shut (< excutio), to scour (< exscorio), to scourge (< excorio), to scortch (< excortico), to mend (< emendo), pistle, spell (< epistola), postle (< apostolus), a cowl (< cucullus), a bill (< libellus), spittle (< hospitale), Spain (< Hispania), story (< historia).

・語中の母音が落ちた例：aunt (< amita), uncle (< avunculus), debt, due, duty (< debitum), doubt (< dubito), count (< comite), to spare

(< separo), stable (< stabilis), quest (< quaesitio), clown (< colonus), monk (< monachus), minster (< ministerium), pencil (< penecillum), crane (< geranium).

・語中の子音が落ちた例：round (< rotundus), roll (< rotula), frail (< fragilis), flail (< flagellum), sure (< securus), rule (< regula), tile (< tegula), seal (< sigillum), entire (< integer), cruel (< crudelis), subtle (< subtilis), noun (< nomen), dean (< decanus), count (< computo), master (< magister).

・子音交替の例：

p → b : bee (< apis), bar ('boar') (< aper), bishop (< episcopus).

g → w : pawn (< pignus), law (< lege), blow (< plaga).

p → f : fell (< pellis), fish (< piscis), father (< pater).

l → r : scrape (< exscalpo).

v → w : ware (< cavere), wedge (< vectis).

f → b : break, breach, brittle (< frango, fregi).

g → ch : beech (< fagus).

sc → sh : fresh (< frigesco), dish (< discus).

v → f : fly (< volo), fleece (< vellus), folk (< vulgus).

c → h : head (< caput), haft (< capulus), halt (< claudus).

f → h : hasten (< festino).

以上の締めくくりとして，子音の音位転換を含んだ極めて激しい縮約の例を挙げておこう。それは，英語の scan の語源はラテン語の examino であるとするものである。ウォリスによれば，まず，語頭の e と語尾の o とが落とされて，xamin になるという。そして，アングロ・サクソン人は x の文字を持たなかったので，それが csamin と表記された。次に，音の響きの良さを理由に，語頭の cs が sc に音位転換されて，scamin となった。さらにここから語中の mi が落とされて，最終的に scan になったとする。

このような原理は，一方，ある意味では後の比較言語学の手続きに通じるものであるけれども，他方，厳密な制約なしに適用されると，どんな語をどんな語からでも引き出すことができることになってしまう。いずれにしても，ここで強調されているのは，英語の本来語は単音節語であり，英語には，多音節の外来語でさえも単音節化しようとする「駆流」(drift)があるということである。

5．同音異義語

次に，今の英語では同じ発音であるけれども，いくつかの異なる意味を持つ語は，それぞれ違う語源に遡ることが取り上げられる。すなわち，同音異義語の語源である。いくつかの例を挙げておく。

Bear : to bear ('to carry') (< fero), to bear ('to give birth') (< pario), bear (the animal) (< fera).

Sound : sound ('noise') (< sonus), sound ('healthy') (< sanus), to sound ('to explore') (< prae–sento).

Perch : perch (the fish) (< perca), perch (roost, the unit of measure) (< pertica).

Spell : to spell ('to resolve words into syllables') (< syllaba), spell ('incantation') (< expello), spell ('message') (< epistola).

Fell : to fell ('to cause to fall') (< fallo), fell ('animal hide') (< pellis).

File : to file ('to abrade') (< polio), file ('a series of things strung together') (< filum 'thread'), to file, defile ('to make dirty') (< polluo).

Porter : porter ('janitor, door keeper') (< porta 'door, gate'), porter ('someone who carries things') (< porto).

6．混成語

最後に取り上げられるのは，語の混成(blending)の問題である。すなわち，英語の語彙には，2語を混ぜ合わせて1語にしたような語(混成語)が数多く見られることについてである。例を挙げてみよう。

Scroll ('writing in the form of a roll') < scrip ('something written') + roll ; prance (denoting the dancing steps of a proud horse) < proud + dance ; sturdy < stout + hardy ; troll ('to twist while throwing, to throw with a spin') < throw + roll ; trundle < throw or thrust + rundle ; gruff, grough ('harshly rough') < grave + rough ; trudge < tread or trot + drudge ; shog < shake + jog ; plate, platter < plain + flat ; scorn < scoff + spurn ; scant < scarce + want ; shatter < shake + scatter ; twink, twinkle < twy + wink ; grind < grate + wind ; grasp < gripe + clasp ; greedy < gripe + needy ; grone < greeve + mone ; crack < cry + break ; stumble < stop or stand + tumble ; slant < slope + lean ; grumble < grutch + mumble ; bend < bow + wind ; crave < cry + have ; quaver < quake + waver ; garish < gaze + whorish or hared (i.e., 'as scared as a hare') ; clasp < close + hasp ; frisk < freak + brisk ; hover < hang or high + over.

これらの例のように独立した2語が混成して1語になることばかりでなく，語頭の子音群 st- と out との組み合わせで stout になることなども取り上げられている。が，これはむしろ音象徴の問題になるので，次のまとめにおいて触れることにしたい。

中心的テーマとしての音象徴

以上，ウォリスの「語源論」の内容を整理し，その詳細を検討した。そこにはさまざまな論題が取り上げられているけれども，振り返って見る

と，全体を貫いているもっとも中心的なテーマは音象徴の問題であることが明らかである。音象徴語そのものの形成に限らず，その他にも，混成語の形成や，同じような音を持つ語が共通する意味を持つ語のグループを成すことに関連しても，語の構成要素の音象徴性が問題にされている。さらにまた，指小語や増大語の形成や，多音節の外来語を単音節化することに関連しても，語を構成する音の象徴性が問題にされている。要するに，音象徴とは，英語の語彙項目を形成する指導原理であるということである。

すでに述べたように，「語源論」の目的は，個別言語としての英語の特質を闡明することにある。この目的との関連で言えば，音象徴性こそは，英語の“英語らしさ”をもっとも本質的に特徴付けるものとして強調されていると言えよう。そこで，ウォリスが英語の音象徴性について述べていることをまとめておこう。

個々の音の象徴性

母音

a　明瞭さ，活気，中くらいの大きさ

i　鋭さ，すばやさ，小ささ

o　大きいこと

u　不明瞭さ，静かさ

oo　量が多いこと

子音

l　頻繁さ，反復

k　突然の終わり

r　粗さ，荒々しさ

いくつかの例証

Smart

Smart は，名詞で「鋭い痛み」，形容詞で「ずきずき痛む」を意味する

語である。例えば，a smart blow という連語は，sm- によって示される「音を立てない動き」で始まり，-ar- によって示される「鋭い痛み」に至り，そして -t によって示されるように「突然終わる」一撃を表す。つまり，「音を立てない動きを伴う鋭い痛打」ということである。

Sparkle と sprinkle

Sparkle(きらめく，火花を発する)では，語頭の sp- が「分散，散乱」を示し，-ar- が「鋭くパチパチと音を立てること」を示し，-k- が「突然の中断」を示し，そして語尾の l 音が「頻繁な繰り返し」を示す。

Sprinkle(まき散らす，ちりばめる)についても同様であるが，ここでは -in- が「飛散する水しぶきの細かさ」を示している。つまり，sparkle と sprinkle との違いは，語中の -ar- と -in- との音象徴性の相違に帰せられるということである。(Sp- と spr- とは，後者の方がより強意的ではあるけれども，本質的に同じである。)

Thick と thin

Thick(厚い，鈍い)と thin(薄い，まばらな)との違いは，前者が k という鈍い子音で終わるのに対して，後者が n という鋭い子音で終わることによる。

Spout, spin (out), spit

Sp- は out と組み合わさって，「(いっぱいに開いた口からのように)～を吐き出す」を意味する spout となる。元来，強い流れをなしてほとばしり出る水について使う言葉である。ところが，同じ sp- に「薄さ」を示す -in が組み合わさると，「羊毛その他の素材を引き伸ばして薄い糸にする」を意味する spin になる。

この語を out と連語で使うと，「～を引き延ばす」とか，「(水その他の液体を)小さな穴や口から放出する」を意味する spin out になる。このように，一方，spout は「(液体を)猛烈な勢いで吐き出す」であるのに対して，他方，spin out は「(液体を)まるで糸のような形で放出する」であ

る。この違いは，–out と –in との音象徴性の相違によるものである。

Sp– が –it と組み合わさると，「口から～を吐き出す」を意味する spit になる。この語と spout との違いは，spit が「音もなく，大きな力も伴わないで何かを外に出す」であるのに対して，spout はその反対に「音を立てて，勢いよく何かを外に出す」である。

また，spit と spin との違いは，spit が「一回で完結する動作」を表すのに対して，spin は「持続する動作」を表すことにある。これは，一方，spit が引き延ばすことができない無声子音の –t で終わるのに対して，他方，spin が引き延ばすことのできる鼻音の –n で終わっていることに帰せられる。すなわち，それぞれの語尾の音象徴性が，それぞれの語の意味に貢献しているのである。

Spark と sparkle

Sp– と –ark が組み合わさると，「パチッと音を立てて飛ぶ一つの火花」を意味する spark になる。ここでは，語頭の sp– が「飛び跳ねる動き」を示し，語中の –ar– が「鋭い音」を示し，語尾の無声子音の –k が「突然の終わり」を示している。この語に「反復」を示す l 音を加えると，「繰り返しパチパチと音を立てて火花をあたりにまき散らす」という意味の反復動詞 sparkle ができる。つまり，spark と sparkle との相違は，「反復」を表す l 音があるか無いかの違いに起因するのである。

Spring, sprout, sprig

Sp– に r が加わって spr– となると，より勢いの強い「拡散，拡張，飛躍」などを表すようになる。この spr– と「鋭さ」を表す –ing とが組み合わさって，さまざまな意味の spring が作られる。例えば，「ばね」という意味は，その「勢いよくはねる動き」から来るものであり，「泉」という意味は，「水が勢いよくほとばしり出るさま」から来るものである。そこから，何事であれ，その「源」をも spring と言うことがある。また，動詞として，「(植物が) 芽を出す」という意味でも使われる。そこから，

植物が芽を出し始める季節である「春」の意味も生じる。

このspr-に-outが組み合わさると，名詞としては「芽」，動詞としては「発芽する」を意味するsproutになる。また，spr-に-igを組み合わせると，「小枝」を意味するsprigができる。Sproutとsprigとの違いは，前者が「厚みや粘りのある芽」を表すのに対して，後者が「小さく華奢な枝」を表すことにある。この違いは，sproutがより重厚な音で終わるのに対して，sprigはより希薄な音で終わることに帰せられる。つまり，これらの語の意味の違いは，それぞれの語尾の音象徴性の相違によるものなのである。

音象徴の問題の歴史性と今日性

本稿の締めくくりとして，ウォリスが強調する音象徴の問題の歴史性と今日性とに触れておこう。

言語起源論

ウォリス自身が考えるように，音象徴が語彙項目を創造する語形成原理であるとすれば，少なくとも語彙に関する限り，これは言語起源の問題に関わるものであると言える。そして，言語起源の問題は，およそ人間が言語について思弁的な考察をするようになった最初の時期にまで遡る。すなわち，古代ギリシャである。古代ギリシャにあっては，言語が「自然によって」生じたのか，あるいは「約束によって」作られたのかについて論争があった。これを語彙に限定してみると，語はそれの表す事物の本性を示すのか，あるいは単に約束事になっている意味を示すに過ぎないのか，という問題である。さらに言い換えれば，語の音と意味との間には必然的な関係があるのか，あるいは単に恣意的に取り決められた関係があるに過ぎないのか，という問題である。

この問題についての論争を扱ったものとしてもっとも有名なのは，プラトンの『クラテュロス』である。プラトン自身は，この論争における二つ

の立場のいずれにも軍配を上げてはいないけれども，その中で，ソクラテスが，音象徴の問題を取り上げていることは注目に値する。ソクラテスは，例えば，r音は「運動」を表現し，i音は「微細なもの」を表すと述べている。

言語類型学

音象徴語の多さを英語の特質と考えている限りにおいて，ウォリスは，個別言語としての英語の特殊性を明らかにしようとしていると言える。これは，現代の用語で言えば，「言語類型学」(language typology)の試みとでも呼びうるものである。

このような傾向の研究は，少なくともベーコン(Francis Bacon)の「哲学文法」(philosophical grammar)の概念にまで遡りうる。ベーコンは，現代語も古典語も合わせて，それぞれの言語の諸特徴を論じて，どの言語がどのような点で優れ，どのような点で劣っているかを明らかにすることを研究課題として提案したのであった[8]。ウォリスは，とりわけ音象徴の問題を論じることによって英語の特質を明らかにしている点で，ベーコンの「言語性格学」の要請に応えていると言えよう。

故事古物研究

ウォリスが，英語は音象徴語が豊かであると言うとき，それは単に客観的な事実を記述しているわけではなく，主観的な価値判断をしていると言える。すなわち，音象徴語が多いことは，英語の美点であり，それは称賛に値するものであるという判断である。言い換えると，これは母国語の本来的要素に対してウォリスが誇りを表明しているということである。同様の誇りは，ウォリスが，英語の語彙に単音節語が多いことを強調し，本来語の表現力の豊かさを褒め称え，ノルマン征服のせいでフランス語が大量に英語に入ったことを嘆くときにも示される。さらに言えば，これは英語のゲルマン的要素に対する誇りであり，英語のゲルマン語からの出自に対する誇りである。

この関連で，ウォリスを，同時代のイギリスの故事古物研究家のキャムデン(William Camden)やファーステガン(Richard Verstegan)などと同列に並べることができるであろう。彼らもまた，母国語のゲルマン語起源に熱狂的な誇りを示した人たちである。例えば，キャムデンの『英国に関する補遺集』(*Remains concerning Britain*, 1605)の改訂増補版(1614)に発表された，リチャード・ケアリュー(Richard Carew)の「英語讃歌」("The Excellencie of the English Tongue")においては，英語の語彙の「表現力」(significancy)が褒め称えられている。ここの「表現力」とは，語の音それ自体によって意味を表す力ということである。まさに，ウォリスが強調する英語の本来語の音象徴性のことである。

普遍言語構想

音象徴の問題は，17 世紀の普遍言語構想とも接点を持つ。17 世紀には，さまざまな学者が，普遍言語を構築する構想を抱いていた。そして，そのうちのある者は，音と意味との間に有機的な関係があるような語彙項目から成る言語を構想していた。

例えば，フランスのマラン・メルセンヌ(Marin Mersenne)は，『普遍音階学』(*Harmonie universelle*, 1636)の中で，「語が自然な意味を持つような言語」，すなわち，「すべての人が，前もって語の意味を知らなくても，発音を聞いただけで他の人の考えを理解できるような言語」を構築する可能性を論じている(1965 [1636] : II, 65)。個々の母音の音象徴性については，メルセンヌは，「a と o は大きくふっくらとしたものを表すのにふさわしく，e は細く微妙なものを表し，i は極めて薄く小さなものを表し，u は曖昧で隠れたものを表す」と述べている(1965 [1636] : II, 75–76)。

同様に，コメニウス(John Amos Comenius)は，『普遍言語』(*Panglottia, c. 1665–1666*)の中で，「これから作る美しい響きを持つ言語のもっとも重要な法則の一つは，語と事物との一定した調和を保つことでなければ

ならない」と主張している(1989：34)。個々の音の音象徴性については，コメニウスは，「l 音は柔らかいものを表現し，m はもやもやしたものを，a はギリシャ語におけるように分離を，e は小さな欠陥を，i はものの小ささを，u は増大を，o は何か度を超えたもの，あるいは全面的なものを象徴することができる」と述べている(Miskovska 1962：240)。

こうして見ると，音象徴の問題が普遍言語構想と密接に関連していることは明らかであろう。ウォリス自身は普遍言語を作りはしなかったけれども，イギリスでもっとも大規模な言語を構築したウィルキンズ(John Wilkins)とは親交があり，言語を含めたさまざまな問題を論じ合っていたことが知られている。

今日の言語学

ソシュールは，『一般言語学講義』(*Cours de linguistique générale*, 1916)の中で，記号の恣意性を強調した。ソシュールは，語の音と意味との関係は，約束事によって成立しているのであって，本来的な関係はないとしたのであった。現代の一般言語学がソシュールに始まるとすれば，このことが音象徴を言語学の関心事ではなくする方向に作用したことは間違いない。その後，「記号の恣意性」は，言語学の初歩的公理であると見なされて今日に至っていると言ってもよいであろう。

が，しかし，記号の恣意性を基本的に認めるにしても，それでもやはり，ある音にはそれらしい意味を表す象徴性があること，逆に言えば，ある意味はそれらしい音によって表される傾向があることは，経験的事実として我々が知るところである。そのような，言わば言語に対する素朴な実感を大切にし，その実感の内実を解明しようとする学者が，20 世紀以降も連綿として登場してきている。

一流の言語学者としては，イェスペルセンが音象徴の問題に特別の関心を示していたことを想起してもよいであろう。イェスペルセンは，『言語』(*Language*, 1922)の第 20 章を「音象徴」と題してこの問題を論じている

し，また，単位論文としては，「母音 i の音象徴性について」(“Symbolic Value of the Vowel *I*,” 1933 [1922])がある。ここでイェスペルセンは，ウォリスと同様に，母音 i が「小ささ」を示す音象徴性を持つことを論じている。

また，Hilmer(1914), Koziol(1972[2] [1937]), Marchand(1969[2] [1960]), Käsmann (1992) のようなドイツ系の学者による語形成論は，音象徴の問題を丹念に扱っている。そして，10 年ほど前に，まさに *Sound Symbolism* と題する論文集が出版されたことを指摘しておきたい（Hinton, Nichols, and Ohala [eds.], 1994)。

さらには，近年めざましい発展と遂げている認知言語学では，「類似記号性」(iconicity)という概念の下に，音象徴の問題も再び重要なトピックになりつつある。「類似記号性」とは，言語の形式と意味との間の有機的な対応関係のことである。この概念によれば，例えば，動詞と目的語との意味上のつながりは，動詞と副詞との意味上のつながりよりも強いので，その意味的関係の強弱が，言語形式としては語順になって現れるとする。一方，He loves Lucy very much. は，動詞 love と目的語 Lucy との強いつながりを語順に反映しているので自然であるが，他方，*He loves very much Lucy. は，動詞 love との意味のつながりがより弱い副詞句 very much が動詞と目的語との間に割って入っているのでおかしいとするなどである。

こういう考え方の中で，音象徴の問題も取り上げられて，ある形態(つまり本来的には音)とある意味との間には何らかの有機的な関連(動機付け)があると見なすことができる場合がかなり多くあることが検証されつつある。ソシュール以来の「記号の恣意性」に対する一種のアンチテーゼである。例えば，認知文法の提唱者であるラネッカー(Langacker 1987 : 12)も，「記号の恣意性の原理」は強調され過ぎており，語彙項目の創成には音象徴がさまざまな形で貢献しているとする見解を支持している。つ

まり，音と意味との関係は，「必然的な」ものではなく，ある種の「約束」に基づくものであるにしても，決してその関係は何でもありといった「恣意的な」ものではなく，そこには何らかの有意味な「動機付け」があるということである。[9)]

こうして見ると，ウォリスの語源論，とりわけ音象徴論は，17 世紀の言語学の到達度を示す過去の記録としてのみならず，今日の認知言語学的な論題との関連においても，詳細な検討に値すると言えるであろう。本稿は，元来ラテン語で書かれているためにその内容を知ることが困難であったウォリスの語源論の詳細を明らかにし，そのような検討のための素材を提供したつもりである。そして，Kemp (1972) がウォリスの『英文法』の英訳版(1972)に第 14 章「語源論」を含めなかったことは，正しい選択ではなかったことを示し得たであろう。

＊　本稿は，平成 15 年度専修大学研究助成による個別研究「John Wallis (1616–1703) の語形成論・語源論の研究」の成果を発表するものである。

注

1）ウォリスの原文では -full とあるが，現代の綴り字で表記する。とくに綴り字が問題となる場合を除いて，他の場合にも綴り字は現代化する。

2）delightsome は，delightful と比較して，より穏やかな嬉しさを表すと説明されている。

3）母音 i という表記は，決して正確な発音を表すものではなく，むしろ綴り字によるものである。が，ここではウォリス自身がこう表記していることに従い，現代の発音記号は用いないことにする。おおむねこれらの綴り字は発音に対応しているものなので，大きな問題はないであろう。

4）後に触れるように，これは現代の認知言語学で問題とされる「類似記号性」(iconicity)の概念に通じるものである。

5）以下にも出てくるこのような語源説明には，もちろん後の比較言語学の観点からは正しくないものも多く含まれている。が，ここで重要なのは，音と意味とに共通性のあるいくつかの語の集まりが認められるという視点である。それらの語が究極的に同じ語源を持つかどうかはむしろ副次的なことである。事実，

後の例では，共通性のある語を並べるだけで，語源には触れていないものもある。

6）実際にウォリスが挙げている例は，以下に挙げるよりもずっと多いことを断っておく。とりわけ，改訂を重ねるごとに音象徴語の実例を増やしていったという事実を指摘しておきたい。Miyawaki (2001) では，ウォリスの音象徴論を中心に論じ，さらに多くの例を挙げておいた。

7）実際にウォリスが挙げている例はこれよりも遥かに多いことをここでも断っておく。また，後の比較言語学から見れば不正確な語源が多く含まれていることは言うまでもない。

8）ベーコンの言説は本稿の前編(宮脇 2004)で引用したので，ここでは繰り返さない。

9）認知言語学の概説書では，Lee (2001) が「類似記号性」の概念に好意的な態度を示している。単位論文としては，Haiman (1983) などを参照。

REFERENCES

Camden, William (1984 [1605]) *Remains concerning Britain*. Edited by R.D. Dunn. Toronto : University of Toronto Press.

Carew, Richard (1614) "The Excellencie of the English Tongue." First printed in the 1614 edition of Camden's *Remains*.

Comenius, John Amos (1989 [*c*. 1665–1666]) *Panglottia or Universal Language*. Translated by A. M. O. Dobbie. Shipston-on-Stour : Peter I. Drinkwater.

Haiman, John (1983) "Iconic and Economic Motivation." *Language* 59 : 781–819.

Hilmer, Hermann (1914) *Schallnachahmung, Wortschöpfung und Bedeutungswandel : Auf Grundlage der Wahrnehmungen von Schlag, Fall, Bruch und derartigen Vorgängen dargestellt an einigen Lautwurzeln der deutschen und der englischen Sprache*. Halle : Max Niemeyer.

Hinton, Leanne, Johanna Nichols, and John J. Ohala (eds.) (1994) *Sound Symbolism*. Cambridge : Cambridge University Press.

Jespersen, Otto (1922) *Language : Its Nature, Development and Origin*. London : George Allen & Unwin.

――― (1933 [1922]) "Symbolic Value of the Vowel *I*." Included in its revised form in : *Linguistica : Selected Papers in English, French and German*, 283–303. Copenhagen : Levin & Munksgaard.

Käsmann, Hans (1992) "Das englische Phonästhem *sl–*." Anglia 110 : 307–346.

Kemp, J. Alan (1972) *John Wallis : Grammar of the English Language. A New Edition with translation and commentary*. London : Longman.

Koziol, Herbert (1972^2 [1937]) *Handbuch der englischen Wortbildungslehre*.

Zweite, neubearbeitete Auflage. Heidelberg : Carl Winter.

Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar,* vol. I : *Theoretical Prerequisites*. Stanford : Stanford University Press.

Lee, David (2001) *Cognitive Linguistics : An Introduction*. Oxford : Oxford University Press.

Marchand, Hans (1969^{2} [1960]) *The Categories and Types of Present-day English Word-Formation*. 2nd edition. München : C. H. Beck.

Mersenne, Marin (1965 [1636]) *Harmonie universelle, contenant la theorie et la pratique de la musique*. Facsimile of the 1636 edition, with introduction by François Lesure. 3 vols. Paris : Centre National de la Recherche Scientifique.

Miskovska, V. T. (1962) "Comenius (Komensky) on Lexical Symbolism in an Artificial Language." *Philosophy* 37 : 238–244.

Miyawaki, Masataka (2001) "John Wallis on Sound Symbolism : One Aspect of 17th-Century Morphophonemics." *Studies in the Humanities : A Journal of the Senshu University Research Society* 69 : 199–223.

宮脇正孝 (2004)「John Wallis (1616–1703) の語形成論・語源論の研究 (1) : *Grammatica Linguæ Anglicanæ* の目的と方向性」,『専修人文論集』第75号, 179–206頁。

Plato (1977 [1926]) *Cratylus, Parmenides, Greater Hippias, Lesser Hippias*. Translated by H. N. Fowler. Loeb Classical Library, No. 167. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.

V[erstegan], R [ichard] (1605) *A Restitution of Decayed Intelligence : In antiquities concerning the most noble and renowmed English nation*. Antwerp : Robert Bruney.

Wallis, John (1653) *Grammatica Linguae Anglicanae. Cui præfigitur, De Loquela sive Sonorum Formatione, Tractatus Grammatico-Physicus*. Oxford : Leon. Lichfield. (Repr., Menston : Scolar Press, 1969 [EL 142].) For an English translation based on the 6th edition (1765), see Kemp (1972).

——— (1699^{5} [1653]) *Grammatica Linguae Anglicanae*. 5th edition. In : *Opera Mathematica*, vol. 3 (*Opera quædam miscellanea*), B1r–80. Oxford : E Theatro Sheldoniano.

Wilkins, John (1668) *An Essay towards a Real Character and a Philosophical Language*. London : S. Gellibrand & J.Martyn. (Repr., Menston : Scolar Press, 1968 [EL 119].)